

Oshima
Letter

大島レター 4

March
2018



目次

へごあいさつ

着実な大島振興方策の推進を

森和男（国立療養所大島青松園入所者自治会 会長）

2

へ最近の活動紹介

山本隆久さんが繋いだ「大島あおぞら市」

3

へ大島の連絡帖

大島シオラマ制作プロジェクト

5

へインタビュー

庵治第二小学校のみなさんにお話を聞きました

7

へ連載コーナー

瀬戸内放送局 今月の「大島アワー」

10

編集後記

着実な大島振興方策の推進を

森 和男 Kazuo Mori (国立療養所大島青松園入所者自治会 会長)

今年は、「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」(通称：ハンセン病問題基本法)が施行され10年になります。「ハンセン病問題基本法」の意義を要約すれば3点になります。

一 ハンセン病問題の解決の基本理念を隔離政策による被害の回復を旨とする、と規定したこと。

二 基本理念の下で、国及び地方公共団体に医師、看護師、介護員の確保義務を定めたこと。

三 ハンセン病療養所を地域に解放することを可能にし、保育所、特養老人施設等他機能施設誘致を可能にしたこと。

基本法が施行され、私たちが直面している喫緊の課題も基本法の実行によつて解決が進むものと考えていましたが、いまだ道中もいたっていないのが実情です。特に療養所は医療機関としてその機能を維持するために医師確保につとめなければなりません。一部施設を除き、医師不足は恒常化

しています。ハンセン病療養所医師の処遇改善を行い、法の枠を越えた何か思い切った対策を考えなければ展望は開けません。

大島青松園は瀬戸内海の離島に施設を造ってしまったという立地が大きな障害となり、将来構想を策定できないまま今日までできてしまいました。現在、入所者は56人と減少し、平均年齢83・9歳と高齢化が加速しています。「国は最後の一人まで面倒をみる」と約束したのであるから、どのようにして最後まで面倒をみるのか具体的な安心策を示していたかなければなりません。

大島青松園の将来については基本的には国が責任を持つべきと考えていますが、平成26年11月に高松市が策定した大島振興方策や、28年2月に香川県離島振興計画に追加した大島地域振興計画に基づく、大島地域を振興する具体的な施策・事業が着実に推進されるよう国に対し理解と協力を要請したいと考えています。

山本隆久さんが繋いだ「大島あおぞら市」



2011年から毎年開催している「大島あおぞら市」(主催:瀬戸内国際芸術祭実行委員会)。始まりは、入所者の山本隆久さん(昭和8生まれ。昭和27年入所。平成元年から陶芸を開始し、大島の土でつくった「大島焼」を多数制作。平成28年没)の素敵な陶芸作品を多くの人に見てもらいたい!でもその機会がない!これが最初のきっかけでした。

高松にある喫茶店や雑貨屋、ものづくり作家さんたちが大島に集まり、小さなお店が集まる「市場」を開催しました。絵本作家の田島征三さんのライブペイントや音楽家によるアートと音楽が楽しめる「コンサート」も開催しました。入所者・出店者・来島者・アーティストの交流がひろがりました。

当初は、山本さんの大島焼のほかに、入所者





さんが作った七宝焼のアクセサリーが並びました。しかしその後、陶芸クラブや七宝クラブの活動がなくなり、出店できなくなりました。最近では、入所者のみなさんが参加しやすい平日に島内限定で開催し、楽しく買い物できる市場やコンサートを工夫しながら開催しています。

2017年は、女優の原田美枝子さんとシンガーソングライターの優河さんをゲストに迎え、華やかなステージとなりました。原田さんは3年前にも来島し、山本さんとも交流があったのですが、再び山本さんに会うことは叶いませんでした。

大島焼がなければ、あおぞら市は実現しませんでした。そして大島焼を介して人と人が繋がりました。一人の入所者の作品が繋いだたくさんの出会いは、今、かけがえないものになっています。



Photo Shintaro Miyawaki



大島ジオラマ制作プロジェクト



「大島のジオラマは、入所者がようけおった昭和30年代がええの」。

その頃は、700人くらいの入所者が暮らし、職員が今よりも遥かに少ない頃でした。「療養所のことはなんでもしよったよ」と、お話してくれるのは自治会の森さんと野村さんです。軽症者による重症者の看病、食事の運搬、園内の整備もすべて患者作業として行なわれていました。多くの入所者は24畳一間で12人が過ごし、ごく限られたスペースで生活していました。

「春になると松の下にヤマツツジがいっぱい咲いて綺麗やったんよ、昔はヤマツツジで花見をしよったからね」。「魚釣り、盆栽、菊などの花作り、畑、野球・・・その頃はみんないろいろしよったで」。

当時の思い出話になると、みなさん話が尽きないくらい次々出てきます。厳しく過酷な時代を生きてきた彼らの暮らし、その生活の中にもささやかな幸せや楽しみがあったに違いありません。

私たちこえび隊は、自治会のお二人や入所者のみなさんとの会話の中で、このようなお話を聞いたり、昔の写真を見たりする機会があると、その頃の雰囲気をもっとよくつかむことができます。しかし、来島する人たちがそのような体験をできるとは限りません。





大島のジオラマは、建物を再現するだけでなく一人ひとりの生活のシーンや思い出も合わせて再現し、伝えることで、当時の大島をよりリアリティを持って感じられる作品にしたいと思っています。

全国13カ所ある療養所の中で、唯一離島にあり「隔離の象徴」とされてきた大島青松園。ここで過ごす入所者さんの記憶や思い出を取り入れ、いろいろな人たちの手によってジオラマを作ります。このプロセスが、ここで生きてきた入所者のみなさんとハンセン病への理解に繋がればと思います。

ジオラマは、大島の歴史やハンセン病について学ぶことのできる施設「社会交流会館」に設置し、2019年に開催される4回目の瀬戸内国際芸術祭までに完成を目指しています。

■ジオラマの詳細

スケール 150分の1

大きさ 横幅6.2メートル×奥行き2.4メートル

設定 昭和30年代、季節は春、入所者が住んでいたエリアを中心に見せる

製作期間 平成30年1月～平成31年3月31日

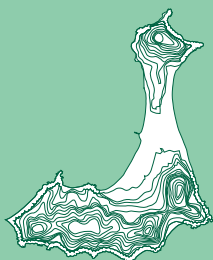
制作者 こえび隊、市民、学生など

監修 金代健次郎(公益財団法人福武財団事務局長)

設計 林幸稔(建築家)

制作管理 NPO法人瀬戸内こえびネットワーク

依頼主 国立療養所大島青松園入所者自治会



庵治第二小学校のみなさんに

お話を聞きました

2018年3月16日。高松市立庵治第二小学校は、最後の一人となった児童が卒業し同年3月をもって、休校になります。「大島」で過ごしたみなさんにお話を聞きました。



Q1 一番に残っていることは？

私たちの学校では、児童が大島を案内する「大島案内 ひきうけ会社」という活動が続けています。案内は、3年生から40回くらいやっていますが、最初から緊張することはありませんでした。なぜなら、先輩がやっていたのを見て「かっこいいなあ、私もやってみたいなあ」と思っていたからです。初めて案内をしたときは周りから「すごい」と言われ、満足感を得られたし、やっていた良かったなあと思いました。

5年生のとき、入所者の方や職員さんにお話を聞いてたくさん勉強しました。職員さんに弟子入りして、施設見学の案内について行って聞いた内容をメモし、自分の案内に生かしました。私が案内できるところは、納骨堂、石碑、ミニ88カ所、風の舞です。特に石碑の「鎮魂の碑」のところでは赤ちゃんができてしまうと、育つ前にお母さんのおなかの中から取り出し、命を絶っていたことをきちんと伝えて

ました。これらは、必ず行くべき場

所だと思われ、重要なポイントとして案内しました。墓標の松、風の舞

から見える景色の美しさ、桜公園

のことを伝えたこともあります。

河野 茉莉花さん

6年生 ①12年 ②学校前の海



「大島歩きマップ」や「ハンセン病(ハンセン病) Do you know」という冊子の制作、動画づくりで大島内をとにかくたくさん歩いたことですね。

初めて島に来たときは大島にどんな素敵な場所があるか分からなくて、島内をくまなく歩いて探していくうちに、徐々に島のことが分かってきましたね。入所者さんに会って声をかけて挨拶するようになったのも嬉しかったですね。入所者さんの講話を聞いて、メモもたくさんとりました。聞き取った事実が正しく伝えられているか、整合性には特に気を配りました。言葉の言い回しや、メモをとった内容に聞き間違いや聞き漏らしがないか。発行前には、できるだけたくさんの方の方に原稿を見ていただきました。お医者さん、福祉関係、自治会、保護者など、みんな熱心に直してくれたので、自信を持って出すことができました。

学校に来てくれた人に渡すと、見やすいと言ってくれる人が多く、

そういう声を聞くと苦勞が報われますね。



日浦 和歌子さん

担任 ①4年 ②桧橋から学校までの海沿いの道

実は私はこの学校に来るまで、大島のことはよく分かっていなくて。以前、人権教育の研修会



糸目 百合香さん

でお話を聞いたことはあったんですが、大島で入所者さんに初めてお会いしたとき、どんな風に接したらいいか、どんな風に話をした

らいいの、そんな心配ばかりが先に立ってしまい、お話ができなかったんですね。でも、茉莉花さんや日浦先生が入所者さんと人間同士の付き合いをしている姿を見て、「私も同じようにしたらいいんだ」と思いました。

以前、入所者の本田さんが畑仕事をしていて、藁を触っていたので「何かお手伝いしましょうか？」と藁を片付けたんです。そうしたら、本田さんが「いやいや、これを敷いているんだ」と言われて(笑)、申し訳ないことをしたなあ。しばらくしたら、学校に本田さんが手にナスを持って来てくれたんですね。不自由な足で学校まで来て、段差のある玄関を上がつてナスを届けてくれた。その気持ちですごく嬉しくて。今でも心に残っていて、ずっと忘れないと思いますね。



Q 入所者さんたちとの思い出は？

大智さんたちとゲートボールをしたことです。とても楽しかったです。(河野さん)

そうそう！出原さんが私たちのチームの監督をしてくださったこともありまして。せっかくの出原監督だったのに負けてしまって。でも一緒にプレイできたことは思い出ですね。(日浦さん)

Q 今の大島についてどう思いますか？

自然がすごく豊かな島。苦しい過去があったんだけど、入所者さんの笑顔が溢れる素敵な島だなあと感じます。(河野さん)

みなさん、とても温かいです。最初は戸惑いの気持ちがあったんですが、意外とみなさんずっと受け入れてくださって。有難かったですね。でも今はやっぱり入所者さんが少なくて寂しいという気持ちが大きいですね。(日浦さん)

風前の灯。なんか本当に消えてしまいそうなそんな感じがしてしまいます。(糸目さん)



Q これからの大島について思うことは？

たくさん人が来て欲しいなあとという気持ちもあるんですが、入所者さんが安心して暮らして欲しいという気持ちもあります。入所者さんの生活が1番大切なので、影響のないようにして欲しいなと。(日浦さん)

大島は特別な島。歴史を学びに来ることができ、人や命の大切さ、生き方を学べる島であって欲しい。入所者さんには元気で長生きしてもらいたいと思います。(糸目さん)

また大島のみなさんに
会いにきます！



私は、入所者さんには元気で長生きで、そして笑顔で生活してもらえたらいいと思います。ハンセン病の歴史は歴史として残し、伝える活動をしていく。一方で入所者さんの一生は保障する。入所者さんには明るい未来を生きて欲しいと思います。(河野さん)

瀬戸内放送局 今月の「大島アワー」

毎月1回園内で放送中の手作りラジオ番組。入所者のみなさんとの他愛もない会話や昔の話で盛り上がる時は、できるだけその声を録音しようと、いつも心がけています。うっかりするとついつい話に聞き入ってしまい、楽しいお話を逃してしまうからです！

今回ご紹介するのは「入所者の方の趣味のコーナー」から、本田久夫さんの花のお世話についてです。このお話も、何気ない会話を録音したものです。大島で過ごすみなさんの日常を少しでもお届けできますように。



温室内の鉢たち。これから花が咲くのが待ち遠しい。

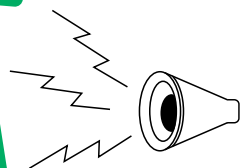


元気なときは、本館の前に3坪くらいの温室があって、そこで300鉢も育てやった。ぎっしりあったよ。植え替えするだけでも大変やったなあ。今は、カトレア、胡蝶蘭、富貴蘭、オンシジュームなどがある。

花の世話は、3日に1回は必ず行っとる。こないだも胡蝶蘭

の花が伸びとったから、折れんように針金を突き刺さして、くりつけたりしたんよ。でも手が不自由やから、なかなかできんのよ。

自分にとって花の魅力は、気を付けて世話をすればするほど、花が大きく咲いて反応してくれる。それに花は小言やいらんことは言わんからね(笑)。「お一來たぞ、みんな元気なか？」と声をかけてあげるんよ。そうやって世話をしとる。自分の思うようになってところがやっぱり楽しいね。



編集後記

3月は、別れの季節。毎年、この季節は異動や退職される青松園の職員さんとお別れがあります。旅立つみなさんが大島を離れるとき、桟橋手前の道の両脇には、入所者のみなさんと職員さんたちがざらりと並びます。一緒に写真を撮ったり、握手をしたり、みなさん名残惜しそうに笑顔でお話している姿は印象的です。船が出発すると、全員が海に向かい、船が見えなくなるまでずっと手を振る光景は切なくもあります。この別れの場面が写っている昔の写真が何枚も残されています。入所者のみなさんは、たくさんの人たちをこれまで大島から見送ったはずです。どんな気持ちで手を振っていたのだろうか、とふと考えてしまいます。

大島レター 4 2018年3月28日 発行 高松市
編集協力 国立療養所大島青松園、大島青松園入所者自治会
編集 こえび隊（笹川尚子、甘利彩子、北川フラム）
問い合わせ NPO法人瀬戸内こえびネットワーク 〒760-0019 香川県高松市サンポート1-1
TEL087-813-1741 FAX087-813-1742 info@koebi.jp www.koebi.jp